



すたち

徳島大学附属図書館報 No.45

1992. 4

目 次

新生生の皆さんへ 〈巻頭言〉 新生生に贈る言葉 1 〈資料紹介〉 総合科学部健康科学ピークⅡと 関係する基本的図書を紹介 3 〈利用法〉 図書館の上手な利用法 4 私の図書館利用法 4 〈エッセイ〉 私と図書館 5 Library Topics 6	私の一冊の本 7 私の一冊の本 8 読書のすすめ 9 活字中毒の一例 9 詩の情景 10 図書館の思い出 11 〈私の研究シリーズ4〉 私の研究 12 〈図書館だより〉 図書館の仕事と利用上の留意点 13 会 議 14 人事往来 15
---	--

『巻頭言』

「新生生に贈る言葉」

後 藤 健 次

新生生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい希望に燃えて、この徳島の地で今後4年または6年をお過ごしになることになりました皆さんに、附属図書館長として、心から歓迎の言葉を申し上げたいと思います。

私が徳島大学に勤め始めてからすでに30年あまりを経過いたしました。その当時、昭和30年代の常三島地区には図書館としては、本当に貧弱な木造の建物が、蔵本分館に対する常三島分館として存在するのみでした。昭和46年に工学部の現在の敷地に新築されて、徳島大学附属図書館本館として出発するまでこの状態が続いたのであります。一方、蔵本分館も幾度かの増改築を経て現在に至っております。図書館の充実を促したのはもちろん徳島大学自体の拡大強化であります。医学部、

歯学部、薬学部、工学部、総合科学部という学部構成は、やや理系に傾きすぎたきらいはありますが、30年代の徳島大学からは想像もできないほどの大発展、大飛躍と言っても過言ではありません。

私はしばしば思うのですが、こういうふう発展した現状を見ますと、この大学の過去、貧弱そのものであった過去の歴史は完全に消滅したのであって、ただ老人の思い出の中でしか存在しないものになっていることです。少なくとも新入生の皆さんには徳島大学の過去などは、全く無関係なものであります。それでいいのであって、この現状から出発して、皆さんはこの大学を一流大学へという、新しい大学の歴史を作り上げねばならないのであります。また実際に、何がどうなるかは知れたものではないのであって、大志は常に高く持つべきものでありましょう。単なる地方大学からの脱皮、地方大学という名そのものの消滅も、すべての大学人の今後の努力次第で実現するものであって、決して夢物語ではないのであります。徳島に限らず、日本における、ここ2、30年の大学一般の充実の歩みはそれを暗示するものであり、現に、第一級の科学的業績がいわゆる地方大学で生まれつつあるのは顕著な事実なのです。

新入生の皆さんはすべて、教養部のある常三島地区で最初の年を過ごすことになりますので、主として図書館本館を利用することになります。すでにご承知のように、冷暖房を備えた快適な閲覧室が皆さんを待っております。大学での勉強はこれまでとは違って、勉強の主体が学生自身であることです。大学で行われる講義はただそれを鵜呑みするだけでは十分ではありません。講義は、ある分野の学問や学説の唯一絶対のものを教えるというよりは、ある学説についての教師自身の一つの考え方を伝えるにすぎません。というのも、学問というものは絶えざる発展を促されているもので、不変のまま停滞することはあり得ないからです。私の外国語教師としての経験から言うのですが、例えば文学作品の翻訳を考えてみた場合、間違っただけの翻訳はもちろん問題外ですが、翻訳する人によって微妙な訳のニュアンスの違いがあります。むしろ完全に同じ翻訳はありえないのであります。そうとすれば一体翻訳によってわれわれは何を読まされているのか、おかしな話になるわけで、案外われわれもぼんやりと見過ごしていることのように思われます。実際に外国語の授業でも、教師の訳を一字一句そのままに暗記する学生もいる一方で、しかしやはり優れた学生もいて、独自の風格を持った自分なりの訳をして教師を喜ばせるものなのです。翻訳の場合ほどははっきりしていないにしても、およそ学問というものが、分かり切った既成の真理を扱うだけのものではないことを、教育課程の1年ないし2年の間に徐々に習得していただきたいと思うのです。

ですからそうなると、頼りになるのは自分の勉強だけだということになります。自分も自分なりに一つの解釈を出さねばならないことになります。大学での勉強が、従来の学説の考え方を参考にし自分の解釈を打ち出すことになるわけです。もちろんそれは大変困難な道ではありますが、そういうプロセスが大学での研究であると理解してほしいのです。そのためには、図書館の保存している資料と情報が有力な武器となるわけで、この助けなしには大学での研究は不可能なのです。図書の利用についてももちろん様々なテクニックが必要ですが、その他最近のめざましい発達で、情報機器を使った情報検索も図書館の重要な利用法となっています。その辺のことは遠慮なしに図書館の専門職員に相談していただきたいと思います。皆さんの十分な活用があってこそ図書館は生きてくるのであります。

(附属図書館長)

「総合科学部健康科学ピークIIと関係する基本的図書の紹介」

野田克彦

新学期のキャンパスで、

後輩 「あ、先輩、ノコンニチは。」

先輩 「やあ、入学でけたん。おめでとう。んで、どこ？」

後輩 「総科なんですよー。」

先輩 「ソーカー、ノ」

後輩 「ほれって、ジョークなんですか？入学したんやけんど大学のことわからんけん、先輩教えて下さいよ。」

先輩 「何に興味あるん？」

後輩 「生き物には、とりあえず興味あるんやけんど。」

先輩 「ほな、健康のピークIIでも考えてみたらは？」

後輩 「はあ、ほなけんど、保健って何しよんかわからんけん。高校の保健体育は内職しよったし。」

先輩 「高校の保健とはちがうんじょ。生命活動を外部とのコンタクトの適応的応答としてとらえるんやって。」

後輩 「なんちゃわかりましえん。ほれってなんですか？」

先輩 「生きてくことは、まわりの環境への対応だろ。瞬間的には神経応答とか、短時間だったら酵素活性やホルモンの変動とか、長い時間なら免疫の成立とか、もっと長いと進化とか。そういったことを勉強するんよ。」

後輩 「むつかしそうやな。ほれやったら区学部や薬学と変らないん？」

先輩 「ほっちは病気っっちゃう異常状態からの回復がおもやけど、健康科学コースはピークI（体育）もII（保健）も正常な健康状態から外れないようにという点でちがうんよ。自分の健康管理は目にみえる生産性とか経済効率はあらわれにくい点で工学部の生物工学ともちゃうんやけんど、かけがえのない命をいかに理解するかに視点を置いとるんよ。」

後輩 「なんか、とっかかりになりそうな、わかり易い本でも教えてもらえる？」

先輩 「ほうやなあ、岩波のNEW SCIENCE AGEというシリーズの中の生物系のものはどうかいなあ。例えば、44巻「DNAに刻まれたヒトの歴史」とか。ほかに「タンパク質—生命を担うこの身近で不思議な物質—」（東京化学同人）とか、放送大学のビデオ教材っっちゃうんもあるんやけんど、値段がバカ高いけん買えんわな。もっと専門的ならワトソン（松原ら監訳）「遺伝子の分子生物学」（トッパン）なんかどやろ？」と先輩風吹かせる。

後輩 「ほなまあ、ぼちぼち読んでみます。」

先輩 「うん、読んだら感想きかしてよ。」

後輩 「ほな、さいなら。」後輩独白 — 何か読まんと、会いに行けんのかなあ —。

（総合科学部生活科学教授）

「利用法」

「図書館の上手な利用法」

中 川 博 夫

新入生諸君入学おめでとう。徳島大学へようこそ。

図書館は受験生であった諸君にとっては、恐らくは勉強部屋代わり兼友達との束の間の息抜きや情報交換の場であったのではないだろうか。大学の附属図書館もそういった性格が多分にある。しかし、それだけでは仮にも最高学府の図書館の上手な利用法とは言えまい。とは言っても、上手な利用法についての常識や定型がある訳ではない。少なくとも私は知らない。だから以下に、体験上、初学者に多少なりとも益になりそうな点を二三記してみたい。

まず、図書館内の配置を経験によって熟知すること。パンフレット類はあくまでも参考にしか過ぎない（ましてこの様な文章はほとんど意味が無い）。そして、少なくとも開架で当面関心のある本の配置は覚えること。図書目録カードは当該の図書が現蔵されていないことを確認する為のものぐらいに心得ておくこと。つまりは、実際に図書や資料を手にとって活用することが肝要。その為には、図書館に頻繁に通うこと。

次に、図書館の職員の方々によく教えて戴くこと。自分ではどうしても検索できない現蔵図書や資料の検索並びに現蔵されていない図書や資料の検索と取り寄せは、館員の方々の手を煩わせなければ不可能である。しかし、少しでも図書館に通ってれば当然知り得る簡単なことをいちいち館員の方に伺うのは避けること。その為には、図書館に頻繁に通うこと。

最後に、自分なりの上手な利用法を早く見つけること。結局いくら立派な施設や蔵書が揃っていたとしても、それを自分の勉学の為に活かすには、自分で利用する以外にはあり得ず、その方法は各人各様でしかあり得ない。だから早くより良い利用法を身に付けること。その為には、図書館に頻繁に通うこと。

結論は、ともかくも何度でも図書館に通って実際に利用することが、図書館の上手な利用法ということだと考える。実践無き知識の無意味さといい、行動無き論理の無力さといい、知性や教養あるいは大学に於ける研究・教育に対する悲観的批判はた易い。無論それに対して謙虚に反省するのにはやぶさかではない。しかし、知の可能性は、それとして如何なる場合でも追究されるべきであろうし、果してその獲得には、実践と行動が大いに要求されるものなのである。従って、実践・行動あるのみ。図書館に通って本を読み資料をあさること。これに尽きる。（教養部文学助教授）

「私の図書館利用法」

阿 部 江利子

私が、大学へ入学して最初に図書館を利用したのは、1年生の前期試験の頃でした。友達数人と試験勉強のために利用したのですが家で一人で勉強するよりも何か気持ちがひきしまったようで勉強の能率もあがったように思います。図書館では、自習室の設備も各階ごとに充分整っており、本を読むにしても、勉強するにしても、大変充実した環境になっています。2階は自然科学分野の図書、3階は、人文、社会科学分野の図書と区別されていて、又各項目別に細かく分類されてあるので、必要図書をすぐにみつけることができ、とても便利だと思います。他に、1週間分の様々な種

類の新聞を読むことのできる閲覧室や、視聴覚室、個室になっている自習室などもあります。視聴覚室などは、大学の授業でもよく利用されているようです。

さて、図書館はこうのように、学生が十分研究、勉強できるように設備されてあるわけですが、私個人も勉強する上でかなり図書館は利用しました。大学の授業では、ある程度の基礎知識があるという前提のもとに講義をすすめていくわけですから、自分はこの教科は勉強していない、知らないでは通用しません。私も大学へ入って講義をうけていて、自分の基礎知識のなさを痛感させられました。しかし、そのまま放っておくわけにもいかず、大学の試験勉強の他に、基礎知識をつけるための勉強もしました。その際に図書館は本当に力強い味方になってくれたと思います。図書の種類も豊富で、高校レベルのわかりやすいものから、専門的に解説してあるものまで幅広く、本当に役立つと思います。又、読みたい文献がみあたらない場合は、図書目録カードを使って探すこともできるので大変便利でした。

このように個人的にも大変役にたった図書館ですが、学生生活も残りあとわずかとなり、自分のやりたい勉強をする時間も限られてきました。あと1年、しっかり図書館を利用したいと思っています。
(総合科学部総合科学科4年)

『エッセイ』

「私 と 図 書 館」

吉 田 秀 夫

図書館の書架の前に立つと、便意を催す。最近では、このような経験は無くなったが、それでも時として、探し求めていた本を目の前にすると軽い興奮を感じる。そして、あたかも運動選手が試合前の緊張と興奮を押さえるため、わざと沈黙思考の姿勢をとるように、静かに本を取出し頁をめくる。

本格的な図書館との最初の出会いは、一浪して入学した阪大教養部の図書館であった。生来、雑多な本を読むのが大好きな私としては、受験勉強以外の本を後ろめたさなしに、且つ無料で自由に借りて読むことが出来るようになったわけである。毎日のように放課後図書館に行き本を借り出しは、3畳1間の下宿で丁度放送の始まったFMラジオの音楽を聞きながら、寝転んで本を読むのを日課とした。但し、今となってはどのような本を読んだか、記憶はあまり定かではない。小説、エッセイ、科学読み物が多かったように思う。サン・テグジュペリの「星の王子さま」を読んで感銘を受け、彼の著作は殆んど読み、挙げ句の果てにフランス語の講義も出席し、この為ドイツ語の単位を落とししかけて途中でフランス語は断念した。

専門にあがって、中之島の校舎に移ると、ここには医学書を中心とした分館があり、分館というものの、本館をしのぐ規模の蔵書が薄暗い書庫に並んでいた。その殆どは専門学術書で教科書、参考書の類は少なかったように記憶している。後になって知ったのだが、阪大中ノ島分館は国内の医学図書館の基幹図書館の1つとして、財政上優遇処置が取られているとのことである。学生時代は、専門学術書を借りだすことは余りなかったが、それでも臨床に進むにつれ歯科関係の商業雑誌は読みやすいこともあり、同級生のなかではよく借りて読んだ部類に入る。

卒業して口腔外科に入局し、本格的な専門書との付き合いが始まった。といっても最初のうちは、外来臨床で遭遇した症例について調べることが多く、読むのも殆ど症例報告で時間と辞書を引く手間を掛ければ大略は理解できた。そのうち、佐藤グループの研究に加わってもらい、原著論文を読ま

ねばならなくなりましたが、英語力が乏しい上に、学生時代は講義も余り出ず、超低空飛行で試験をやって来たものだから、内容が殆ど理解出来ない時期が長く続いた。さらに、連日のように佐藤先生より、多量の文献複写を指示され、図書館と学部のコピー室を本を抱えて往復することが診療後の仕事になった。君も自分の分のコピーを取って読みなさいと言われ、最初はせっせとコピーしていたが、10分の1も読み切れず、1度も読んでいないコピーが頻回の引っ越しにも拘らず、今だにロッカーから出て来ることがある。

昭和51年に、麻酔研修目的で1年間川崎医大に赴任した。最初の半年間は、川崎医大の母体になった岡山市内にある川崎病院で研修を受けた。この病院は私立病院としては、やや規模の大きい部類に属すると思われるが、図書室は非常に充実していると感じた。川崎病院の蔵書の大部分は、医大創設に際し大学図書館に移したとのことであるが、それでもIndex Medicusを始め基本的な学術雑誌はそろっていた。さらに、有難かったのは文献複写を他大学の図書館のものでも無料でやって貰えたことである。医大の図書館は、広いスペースがとってあり、書架のあちこちにはまだ空間が目立ったが、それでも苦勞して収集したと思われる雑誌が並んでいた。

11年前に徳島大学歯学部へ赴任した当初は教室図書の占める割合が多く、どこへ借りに行ったらよいのか戸惑ったが、間もなく慣れた。ただ、教室図書借りだしの場合は、自分で書架の中から本を探す、あのワクワクした感じが少ないように思う。(歯学部口腔外科学第二助教授)

"Library Topics"

赴 秦 晋 (Zhao Qinjin)

How to find out the best way in research work? How to avoid foolish opinions? How to resolve the problems we meet? One of the better answers to these questions is going to a library to consult with many intelligent people by reading their work, which will stimulate our inspiration and originality.

In my past research experience, I benefited a lot from the library at Tsinghua University in P. R. China, where I studied in the master course of the Department of Civil Engineering for two years. Founded by American as a missionary school in 1912, Tsinghua University has developed a lot and now is the best University in P. R. China. The library there is considered as excellent one as well. Equipped with hundred thousands of textbooks and hundreds magazines on civil engineering, the library provides us with essential materials for study and research. The Foreign Textbook Center located in the campus enables us to refer to the textbooks, research reports and master or doctoral theses published by the related universities or research institutes in the world. There is also a computer network system related with National Library, Beijing Library, National Information Center and some information centers in the world that enables us to make use of the materials that are not stored in the university library. I started my research work on master thesis from searching references in the library. After collecting many useful research papers and reports, I realized the recent development in my field and put forward an intended research plan that contributed to my pursued successful work greatly.

Now I am studying in The University of Tokushima as a doctoral course student. The library at the university will play an important role in my future study and research work. On my first impression, it looks as if that the library is not very large but exquisite and the stored books are not so many but concise. The magazines newly published in Japan and out of Japan can be referred to in the university library or the small library in the department of civil engineering. The CD-ROM facility enables readers searching desired materials very easy and convenient to a greater extent. Audio-visual materials make studies in the library joyful. On the other hand, in my private eyes there are not many english books and magazines in the library and that would be not convenient for foreign students. Anyway, it must be very helpful for me to make use of the library in the future.

(工学研究科生産開発工学専攻, 博士後期課程, 中国)

「私 の 一 冊 の 本」

白 川 悦 久

昭和61年, 岡山駅の書店で「無能唱元著・人を動かす五大本能の魔力(文化創出版)」を購入した。東京に向かう新幹線で読み始め, 思わず内容に引き込まれた。夕方の研究会が終了して, その日のうちに読み終え, 自分自身の性格の問題点, 諸事への対処の仕方など, いろいろと深く考えさせられた。

私達は日常接触する人(患者, 家族を含め)にどんなに熱意を持って説得しても, 相手が理解しない, あるいは行動しないという状況に直面することが多い。本書は, 無意識に動かされていく人間の本能的衝動(欲求)を明らかにし(前半), その不可思議な力によって今まで気付かなかった自分の中に眠っている潜在能力をフル活用し, 人間関係を成巧に導いていく秘訣を示している(後半)。

本書の前半部分で, 人間の本能的欲求を, (1)生存本能(死にたくない), (2)群居衝動(孤独はイヤ), (3)自己重要感(自分は他人より劣っているのではないか), (4)性欲(異性に好かれたい), (5)好奇心(物事を何んにも知らないのではないか), の5つに分類している。これらの1つ(とくに自己重要感)でもあなたが他人に対して充足してあげることができれば, あなたはいつも他人を魅きつけてやまない人生の成功者になることができる, と主張する。また, 「少年少女時代, その親が子に接する態度として最も必要な行為は, (1)注視, (2)賞讃, (3)ほほえみ, である。他人に対し, この3つの行為が与えられない人間は確実に自己劣等感の悩みをいだいているのである。これは愛情表現の肯定的発揮法といえる。」「喋った言葉は自分の耳も聞いている。耳から入ったいろいろな言葉は暗示語となって, 自分の深層意識に蓄積する。この無意識の自己暗示は確実にその人の人生に大きな影響を与えるため, 『否定的言語』はできるだけ使わない。」「人生貸し越し説」などの記述がなされている。

患者を治療・指導していて, 「この人はわざと良くないことをして状態を悪化させているのだろうか」と疑問あるいは無力感を覚えたことがある。「宇宙存在は『陰陽』の発露として表現されている。我々には『生きたい』という生存的欲求(進化発展願望)と同じく, 『死にたい』という自己破壊願望(退行性願望)も合わせもっている」の記載に出会い, それまでの疑問が氷解したよ

うに感じた。

後半部分では、「緊張とは自然発生的に生じてくるものだが、弛緩は人為的努力を必要とする」、「思念の法則・阿頼耶識」、「瞑想のすすめ」などが書かれている。再読するたびに、最近の私は後半部分に共感を覚えるようになってきている。

本はいろいろな読み方、感じ方があって当然だと思う。自分自身に何かを問いかける本として本書の一読をお勧めする。また、何年か間をおいて再読されることをお勧めする。

(医学部附属病院小児科助手)

「私の一冊の本」

林 敏 浩

本に書かれている一文が心に鮮烈に残るというようなことをみなさんも経験したことがあると思います。私が最近読んだ本の中にそういう本が1冊あります。その本は「カッコウはコンピュータに卵を産む」(原題:Tracking a Spy Through the Maze of Computer Espionage)という本で1986年に起きたハッカー事件についてのノンフィクションです。

簡単にあらすじを紹介しますと、この本の作者であるクリフォードストールが天文学研究のかたわら、コンピュータのシステム管理者になることから始まります。彼に与えられた初めての仕事が、研究所のコンピュータシステムの使用料金合計が75セントだけ一致しないので原因を究明してくれというものでした。クリフォードは最初プログラムのミスが原因であると思い調査を進めていくうちに正体不明のコンピュータユーザが浮かび上がってきて、このユーザはハッカーであり、誰かがコンピュータに侵入してきている事実気づきます。しかも研究所のコンピュータを足場にして国防総省のネットワークをくぐって各地の軍事施設や基地のコンピュータに侵入し、陸軍のデータベースを読みあさりCIAの情報にまで手を伸ばしていることが明らかになっていきます。クリフォードはハッカーの目的とどこからどうやって侵入しているのかを明らかにしようとします。

しかしクリフォードの行動を研究所の人々は天文学をやらずに何をしているのかといった目で見ます。またクリフォードがこれを事件としてFBIなどに捜査を依頼しますがどこも扱ってくれず、クリフォードの調査は難航します。しかし、結末としてクリフォードはハッカーを追いつめました。クリフォードがこの調査をなした要因はいくつかあるのですが、そのひとつとしてクリフォードの上司が「殉教者きどりはよしたほうがいい。クリフ、ハッカー追跡をひとつの研究と考えたらどうかね」と言ったことがあげられます。これによってクリフォードは科学的な研究方法をハッカー追跡に適用して理論的に調査を進めていきます。

私はこの一文がとても印象に残っています。私は現在はコンピュータ援用による教育(CAI)の研究を行なっています。そして研究室のコンピュータの管理者をやっています。分野は違いますがクリフォードとよく似た環境にいます。特にネットワーク管理が大変でよく管理者をやっているのがいやになることがありました。そんな時かならず“研究に関係ないこんなことをなぜやらなければならないのか”と思ったものでした。しかし、この本を読んでから“コンピュータ管理も研究の一つだと思えばいいのだ。もしかするとコンピュータ管理から今の研究にプラスになるものが出てくるかもしれない”と考えるようになりました。その意味でコンピュータ管理の精神的苦痛から開放してくれたこの本は私にとって大切な本の一冊になりました。これからもこういう本に多く出会えればと思います。

(工学研究科システム工学専攻博士後期課程2年)

「読書のすすめ」

小木曾 正 博

新入生の皆さんへの「読書のすすめ」とのことですが、こと読書に限らず、「乱読・乱聴・乱見」をおすすめしたいと思います。

変にジャンルにこだわったり、評価の定まったものを選んだりせず、悪食を恐れず何にでもトライして下さい。漫画もビデオも映画もいいと思います。コンピュータ・ゲームから長編大河小説以上の感動を得ることだってあるでしょう。音楽も好き嫌いせずに何でも聴きましょう。

18歳ごろというのは、一生のうちでもまだまだ感受性が鋭く、しかも分析的な批判能力も発達してきている、大変面白い時期だと思います。この時期に出来る限り多くの情報をインプットしておくことは、その後の生き方を決めるにあたって必ず何かの役に立つと思います。それに話題を豊富にしておくことも大切です。大人になって、酒を飲んでも会社や仕事のことしか話題のないビジネスマンの人などは、ひょっとするとこの時期の情報のインプットが少なかったのかも知れません。

とにかく、柔軟な感受性を持ち、そして時間もある、この学生時代に色々なメディアに接し、様々な経験をして、自分の世界を拓けていってください。(医学部附属病院眼科助手)

「活字中毒の一例」

小木曾 正 博

症 例：31歳 男性

主 訴：3日以上本を読まないと手が震える

既往歴：特記すべきことなし

家族歴：特記すべきことなし

現病歴：学生時代より、試験が近くなると無性に本が読みたくなる、トイレにも読むものを持って入ってしまう、本屋の前を素通りできない、という3主徴を呈しており、年毎に増悪している。

私はどうやら活字中毒のようです。この病気は他にも、「待合室などで読むものがないとパニックに陥る」「面白い本を読んでいると寝食風呂トイレを忘れるので不健康・不衛生である」などの多彩な症状を示します。幸福な人生を送るためには、このような病気にはかわりあいにないのが望ましいのですが、万一罹患してしまったならば、

「読み続ける」

これしかないようです。

読書というのは、中毒症状があるくらいですから、酒・タバコと同じ嗜好物の一種と思って間違いありません。いわば趣味の領域です。他人に指図したり、無理にすすめたりする種類のものではないのかもしれませんが、知識が増えて、人間性が深まるなどと国語の時間に教わったような気もしますが、自分自身に鑑みてみるに極めて疑わしい(読んだ本が悪かったのでしょう)。だいいち本を読んだだけで得られる知識とか人間性にどれほどの意味があるのか。読書家は、本を読むことが好きで楽しいから本を読むのであって、それ以上でも以下でもありません。

さて、いまのワープロの横には、図書館から借りてきたばかりの5冊の本が積み上げられ、ページを繰られるのをじっと待っていてくれます。面白そうな本がたくさんあって、図書館で借りられるこの時代は、まさに活字中毒患者にとって至福の阿片窟と云えそうです。皆さんも不幸にして活字中毒に冒されたならせいぜい図書館をご利用ください。 (医学部附属病院眼科助手)

「詩の情景」

三好圭子

「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えし時 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり」これは、藤村『若菜集』の“初恋”の一節です。私はこの詩に強く惹かれて、藤村の詩集を読みはじめました。

彼は前書きにこう述べています。

「生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなわち新しき生涯なり。」と。

この言葉に象徴されるように、彼の詩は青春あふれるような生命の鼓動を、韻文詩という形で見事に歌いあげています。それはまさに彼の心の発露であり、また読者にとっては自分達の心の発露であるようにさえ感じられます。詩の魅力は、1つにはこうした心の同化作用にあると思います。

「言葉に羽が生えると詩になる。」といったのは実篤です。私はこの言葉がとても好きです。

作者のあふれる思いや感情の高まりは、言葉となり、羽が生えることによって初めて私達に深い感動を与えてくれるのです。

実篤の詩は常に穏やかで、人を包みこむ大きなやさしさがあります。それは実篤自身の人間像でもありましょう。彼の詩集は幾度読み返しても、その度ごとに様々な表情を見せてくれます。以前理解できなかった詩が素直に読めたり、気づかなかった言葉に新たな感動を覚えたりします。これも詩の持つ大きな魅力の1つではないでしょうか。あの短い言葉の中に集約されたもの、それは常に新しく、読者の心の奥に深く広く浸透していくのです。

他にも心に残る詩集として高村光太郎、宮澤賢治の詩集などがあります。

最近、私は専門課程で実習や試験に追われる毎日を過ごしています。そうした中で、時には心にゆとりを失い、空虚な気持ちや焦燥感にとられることがあります。そんな時、一編の詩を読むことによって自分をとり戻すことができるような気がします。

ここで先述の詩集の他に、やや趣を異にしますが星野富弘氏の「風の旅」を紹介します。

彼は中学の体育教師でしたが、不慮の事故により手足の自由を失いました。教師生活わずか2カ月目のことです。しかし彼は“口”という手段を使ってこの詩画集を作りあげ、今も執筆中だそうです。私はこの本を読むうちに熱いものがこみあげてくるのを感じましたが、涙して読むではいけないという、強い思いにかられました。彼の人生観が根底に流れているからでしょうか。

最後に彼の一編の詩を紹介します。どう感じられ、心に受けとめられるでしょうか。

「ひとは空に向かって寝る 寂しくて空に向かい 疲れ切って空に向かい 勝利して空に向かう
病気の時も 1日を終えて床につく時も あなたがひとを無限の空に向けるのは 永遠を見つめよと
いっているのでしょうか ひとは 空に向かって寝る」 (歯学部歯学科専門課程3年)

「図書館の思い出」

今井八栄

5月の新緑まばゆいころ、私はガランとした人の少ない図書館の机の上でうとうとしかける。何が誘いこむのでもない。誰が呼び込むのでもない。全開となった窓から初夏の風が快く流れてくる。そして私のほほを通りすぎるたびに私のうとうとは深さを増す。

あの頃が1番おだやかに、そして平穏であった気がする。大学1年の新鮮が今ありありとよみがえる。やっとぬけだした繁の中から急に自由と時間のたっぷりある世界へ送り込まれる。多少ほっとする気持ちと、とまどいと、そして今から作りだす自分の未来への希望を不確かではあるがしっかりと胸に秘めながら……。

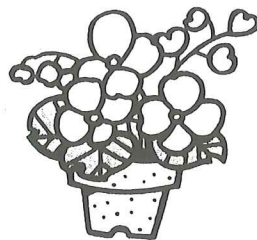
5月の風とともに、古くさいがしかしあたたかいたくさんの本のおいが私のまわりの空気をつつむ。哲学、文学、自然科学、芸術、心理学……かぞえきれないほどの分野が私を誘いこもうと手まねきをする。私は胸をドキドキさせながらあちをみたりこちをみたり手あたりしだいに歩きまわる。すべてのものが新しく新鮮で……。

ふと私は我にかえる。どの位時間がたったのであろう外は夕やみにつつまれてうすぐらい。窓の外に目をやると、青々としたしだれ柳とくねくねと形のよい川がみえる。そのもうすこし左側には川と川の間の中島に作られている眉山会館があり、これらの3つは非常に優美でなごやかな景色を調子よくうみだしている。また右前方にはいつもあたたかくそしてき然とした眉山が頭をのぞかしている。まだ頭ははっきりしてはいないが、今までみた夢とこの美しい景色のかもしれない不思議な世界があたり一面に広がっている。

もうあれから4年がたつ。今でもあの頃の風景はそのままである。しかし私の心の中には様々の思い出や、この図書館が私に与えてくれた心の財産がしっかりと刻まれている。ここを去っていくのはさみしい。しかし、また新しい自由を得た人がここにやってきて、さらに心の財産を積むであろうと思うと、あたたかい気持ちが湧いてくる。

今は3月、まだ風は冷たく、陽光はかすみがかかる。5月のあの日とはちがうが、ここにくる鮮明にあの頃がよみがえってくる。

(総合科学部総合科学科卒業)



「私 の 研 究」

伊 藤 禎 彦

私のこれまでの研究を一言で紹介すれば「飲料水の安全性評価」ということになります。具体的に説明しましょう。例えば徳島市内を流れる新町川の水をコップ1杯すくって飲んだとしたらどうなるでしょうか。「まずい」ことはさておくとして、中にはたくさんの大腸菌やウイルスがいるかも知れず、これによって下痢や腹痛を訴えることになるかも知れません。もし乳幼児が口にしたら病気になりそれが引き金になって死亡する危険性すら否定できません。新町川の水が飲料水になることはありませんが、飲み水になるもとの水は多かれ少なかれこのような潜在的危険性があると認めなくてはなりません。浄水場ではこれらの微生物の活性を失わせるために多くの場合塩素による消毒が行われ、各家庭へ運ばれます。こうして私たちは安心して水道の水を飲むことができるのです。

ところが問題はそう簡単ではありません。というのは水中に存在するのは微生物だけではないからです。塩素処理をすると水中の有機物質と塩素とが反応し、有害な有機塩素化合物が生成します。そのうちの代表的なものがクロロホルムという物質であり、実際この物質の発癌性が確認されています。塩素処理をする限り有機塩素化合物の生成は避けられずこの結果水中には必ず発癌物質が入っているといえます。

塩素消毒によって微生物的な危険性をなくすことができる反面、新たに発癌など化学物質による危険性が発生する……塩素消毒のジレンマがここにあります。

水源の汚濁が進みますと、よりたくさん塩素を投入する必面があり、それによってまた発癌物質などの生成量が増えることになります。塩素消毒方法はこのままでよいのか、他にもっと優れた消毒剤はないのか、飲料水にリスクがあるのが避けられないのなら許容できるリスクはどの程度なのか、等さまざまな問題が噴出し、これらは現在、日本を含めて世界中で検討されている真最中です。水源の汚濁の進行に伴って、私たちが安心して水道の水を飲める根本というべき水の消毒法そのものの変更が迫られているともいえるでしょう。

私は、微生物的安全性を調べるために、ウイルス汚染の指標として大腸菌フェージ（大腸菌に感染するウイルス）をとりあげ、塩素と他の消毒剤の消毒効果を比較しています。一方、有害化学物質の評価のためには、哺乳動物細胞を用いた染色体異常試験を行っており、さらに異常の発生した染色体の検出、定量化は染色体像を画像処理して行う方法をとっています。その結果、塩素の消毒剤としての特性、他の代替消毒剤の特性などの基礎資料が徐々に蓄積されてきているところです。

（工業短期大学部土木工学科第2教室講師）



「図書館だより」

「図書館の仕事と利用上の留意点」

情報サービス係

図書館の仕事は、図書や雑誌や視聴覚資料の選定、発注、受入、目録、貸出等々と多岐にわたりますが、ここでは利用者の皆さんに関係の深いサービス部門の仕事について、図書館ではどのようなサービスを提供しているか、また、そのサービスはどうしたら受けられるかといった観点から、利用上の留意点も含めて説明します。なお、この説明は附属図書館本館を前提にしています。

〈入館及び退館〉

図書館へは自由に入ることができますが、ノートや筆記用具以外は備付けのロッカーに入れて下さい。また、図書を持ち込む場合は、2階貸出カウンターの係員から「図書持込票」の交付を受け、各図書ごとに挟んでから入館する必要があります。退館の際には、「図書持込票」はカウンターに返却して下さい。

〈館内閲覧〉

2階には自然科学系図書の閲覧室と、指定図書（授業に関係して必読すべき図書及び参考とすべき図書）の閲覧室が、また、3階には人文・社会科学系図書の閲覧室や新聞コーナー、一般月刊雑誌・週刊誌コーナーがあり、自由に閲覧することができます。辞書・事典等の参考図書も各閲覧室に配架されています。

〈館外貸出及び返却〉

資料の館外貸出を受けるためには、「図書館利用証」が必要になります。「学生証」を持参し貸出カウンターに交付の申請をして下さい。5冊までの図書を10日間以内借りることができます。また、貸出予約、貸出期間の延長も可能です。

返却は貸出カウンターの係員までお願いします。図書館閉館時は玄関に設置されているブックポストに投函して下さい。なお、貸出期間を超過した場合には、超過日数分の貸出停止となりますので十分注意してください。

〈資料の探し方〉

図書を探したいときには、カード目録とオンライン利用者用目録（OPAC）の両方を検索する必要があります。現在のところOPACでは閲覧室配架図書、平成元年度受入れ図書の1部及び平成2年度以降の受入れ図書しか検索できませんので注意して下さい。雑誌はOPAC「学術雑誌総合目録」等で調べることができます。

カード目録の引き方、OPACの使い方等が分からない場合には、レファレンス・カウンターの係員に尋ねて下さい。

なお、学校内に求める資料が所蔵されていない場合には、他の大学図書館等から借り受けたり、コピーを取り寄せることもできます。また、直接出向いて利用したいときには紹介状を発行しています。

〈利用相談〉

レファレンス・カウンターでは、二次資料（抄録誌、索引誌等）利用方法、文献の所在調査、特定の人の略歴・著作の調査や研究機関の所在地の調査等々についての相談を受け付けていますので係員に尋ねてください。

〈視聴覚室の利用〉

レコード・ビデオ・CD等の利用を希望する場合は、「視聴覚資料リスト」を検索の上、貸出カウンターに申し込んで下さい。平日は9時から午後7時30分まで、土曜日は9時から午後4時まで利用することができます。

〈文献の複写〉

図書館所蔵の資料を複写したい場合は、「文献複写申込書」によりレファレンス・カウンターに申込み下さい。1枚20円でコピーすることができます。受付時間は、平日が9時から11時30分、午後1時から4時まで、土曜日が9時から11時30分までとなっています。

〈一般的留意点〉

図書館は学習・調査する場所であるとともに、思索する場所でもあります。館内では静粛を保ち他の利用者の迷惑にならないよう注意して下さい。また、館内での飲食、決められた場所以外での喫煙、資料の汚損・破損等のないように注意して下さい。

以上、図書館サービスの概略を説明しましたが、図書館の資料、スペース、人（サービス）を多に利用し、有意義な学生生活を送られるよう期待しています。また、図書館を利用するに当たって不明な点がありましたら、気軽に係員に尋ねてください。



「会 議」

附属図書館運営委員会

対応について

第6回

日 時 平成3年10月28日(月)
15時10分から
場 所 附属図書館会議室
議 題 1 学内設備等充実費(学生
用図書購入費)の使用計画
について
2 土曜閉庁に伴う図書館の

第7回

日 時 平成4年1月20日(月)
15時10分から
場 所 附属図書館会議室
議 題 1 土曜閉庁に伴う図書館の
対応について
2 自己点検・評価について

第8回

日時 平成4年2月17日(月)
15時10分から
場所 附属図書館会議室
議題 1 土曜閉庁に伴う図書館の
対応について
2 平成3年度学生用図書購
入費(第2次)配分(案)

について

- 3 平成3年度外国雑誌購入費
配分(案)について
- 4 平成3年度予算節約額につ
いて
- 5 情報処理センター運営委員
会委員の選出について

「人事往来」

(辞 職)

高 嶋 初 枝

雑誌情報係

平成 3. 11. 30

(採 用)

中 島 孝 子

雑誌情報係

平成 4. 1. 10

編 集 後 記

新入生の皆さんへ、御入学おめでとうございます。苦しかった受験勉強から開放され、今、未来の目標に向かって、選んだ学府へようこそ。

学習から研究への場へと、それが図書館なのです。図書館は、学習、研究、教養、趣味と幅広く、皆さんを満足させてくれるでしょう。また、人生の出会いの場ともなるのが、図書館です。学習で疲れた皆さんを窓外の川の流れが、新緑の城山が、そして美しい音楽の調べやなつかしい映画がやさしく癒してくれるでしょう。

この「すだち」は、前途ある皆さんと図書館のかけ橋です。今回は、皆さんの先輩や先生が、図書館について、いろいろな角度から書いてくれました。

図書館は、皆さんの勉強、憩いの場です。そして図書館員(司書)は、皆さんのお友達であり、お手伝いさんです。分からないことは、何でも聞きましょう。

お待ちしております。!

編集委員会：委員長・後藤健次 委員・熊谷正憲，三村康男

発行 徳島大学附属図書館

(〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(本館)(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950